

富士山に祈りを捧げた貴族たち

11 世紀、新たな信仰行為として經典の埋納が行われるようになりました。現在知られている最古の例は、1007 年に大和国（現在の奈良県）で埋められた金箔張りの銅製の入れ物に入った經典一式です。これは、「源氏物語」などの古典文学作品を生んだ宮廷社会の中心にいた貴族、藤原道長が奉納したものでした。この新たな慣習の背景には、末法思想と呼ばれる退廃の時代がやってくるという仏教の教えがありました。

仏僧たちは末法が 1052 年に訪れると算出しました。彼らは、末法の世では仏教の教えが失われ、はるか未来に弥勒菩薩が到来するまで絶望が続くと警告しました。経済的な余裕のある人々にとって、この破滅的な事態の影響を軽減する（そして自分の功德を積む）方法の一つは、弥勒菩薩の時代に発見されるように經典の写しを埋納することでした。

藤原顕長（1118-1167）は、三河国（現在の愛知県東部）など複数の国で行政官を務めた貴族でした。富士山のそれぞれ東、西、南にあるこの山が良く見える地点で顕長の名が刻まれた壺が出土しています。研究者は、これらの壺には經典が収められていたと考えており、今後、富士山の北でも顕長が埋めた壺が見つかる可能性があるとしています。

同じく 12 世紀に活躍したのが、末代という修験者でした。生涯に何百回も富士山に登った末代は、富士上人としても知られました。彼は富士山頂への經典の埋納を企画し、このために多くの寄付を集めました。彼の人物伝には、彼は都にまで訪れて鳥羽法皇（1103-1156）の支援を得たとあります。近代、富士山頂では実際に朱で書かれた經典が発見されました。末代が埋納したという証拠はありませんが、これらは 12 世紀のものと考えられています。

また、富士山の北面、吉田口登山道上の重要な巡礼地でも埋納された經典が出土しています。明らかに、末法思想の影響は富士山にまで及んでいました。